

# 1930年代における社会改良としての「社会学」的实践

—赤神良讓の「変態社会学」的方法による〈尖端〉研究から

日本学術振興会 大尾侑子

## 1. 目的：

本発表では、1930年代前半にジャーナリズムの流行語であった〈尖端〉概念が、いかに「社会学」の分析対象として論じられたのかを戦前期に活躍した「社会学者」・赤神良讓の議論から明らかにする。これを通じて、近代日本における「社会改良の学としての社会学」に関する理解を深めることを目指す。

## 2. 先行研究と分析視角：

建部遯吾に師事し明治大学で教鞭を執った社会学者・赤神良讓（1892-1953）の存在は、現在ではほぼ顧みられないことがない（飯島 1993;川合 1998）。その存在が取り上げられるのは『環境社会学』の著者として、あるいはその日本主義的性格について論じた石田あゆ（2006）の優れた研究等に限定される。

しかし「社会学者」でありながら当時のタコツボ的な大学人・大学制度の改良を唱え、言論活動の場をジャーナリズムに移した（石田 2006：218）赤神の議論を具に検討することは、戦前昭和における「アカデミズム／ジャーナリズム」の連続と断絶について知る上でも意義があるだろう。

本発表では赤神社会学の内実を明らかにした上で、彼がジャーナリズム上で展開した時代診断を検討する。分析に際して、当時の社会相を示す流行語であった〈尖端〉に関する論考・「尖端の心理学」を資料とする。

## 3. 分析の結果

赤神にとって社会学とは、「日本の現状の解明を通じて國體に貢献できる学問」（石田 2006：216）であり、それが「取り扱ふべき問題」は第一に社会学的方法論（赤神 1927：47）であった。その研究法にはデータ収集による基礎資料の中から理法を発見する理論社会学があり、さらに赤神は社会事象を「常態/変態」に分類したうえで、社会問題の研究を目指す后者の「変態社会学 Sociologie anomal」を重視した。そして「社会構造の変態」を「反社会性をば濃厚に來りたる状態であり、社会全体の能率をば阻害」するものと位置付ける（赤神 1933：10）。つまり「変態社会学」の追求を通じて社会科学が社会改良に繋がり、ひいては國體への貢献と繋がる（赤神 1927）という独自のロジックが展開される。

ここから赤神は、「社会の変態」の事例として〈尖端〉を取り上げる（赤神 1931：44-47）。尖端とは「第一回のみを求める」近代人の刺激追求の態度とされ、それは「尖端崇拜を商品化せんとする資本主義社会の機制によるものである」（赤神 1931：46）という。さらに、強烈な刺激に満ちる社会は「ついには猟奇的になり、変態的となり、グロとなり、テロとなり、犯罪的となり、殺人的となり、悪魔的となり、極度に現代社会をウルトラ化して行く」（赤神 1931：46）と、戦争前夜の社会状況を描写／予告した。

## 4. おわりに

以上のように、〈尖端〉概念は赤神社会学において資本主義システムがもたらした社会問題、すなわち近代化に伴う社会構造の「変態」的事象として語られた。一回性への渴望は横行していた猟奇殺人や政治テロ、エロ・グロ・ナンセンスブームの誘因とみなされ、國體を脅かすという点で変態社会学が「改良」すべき対象として把握されたのである。社会改良の学としての社会学という立場ゆえに、赤神はその活動の場をジャーナリズムに求め、自らの言論を通じて社会学的实践の遂行を試みたと言えるだろう。

[文献] 赤神良讓 1927 『社会学』清水書店./赤神良讓 1931 「尖端の心理学」『現代猟奇尖端図鑑』新潮社/赤神良讓 1933 『変態社会の理論的考察』明大会./飯島伸子編 1993 『環境社会学』有斐閣./石田あゆ 2006 「日本主義的社会学の提唱 赤神良讓の学術論」『日本主義的教養の時代—大学批判の古層』柏書房./川合隆男ほか編 1998 『近代日本社会学者小伝』勁草書房。